

福井大学学術交流協定校への派遣留学（交換留学） 月例報告書（2月分）

留学先大学：貿易大学

氏名：小泉春樹

1月の28日から3週間、ベトナムでは陰暦の正月ということで大学が休みとなった。生活が落ち着き、成長のためにやっていきたいこともまだまだ探し途中だった僕は、この機会に東南アジアを巡ってみようと思い立った。お金や時間を考え、最終的に行き先はホーチミン（ベトナム）、プノンペン（カンボジア）、バンコク（タイ）、ヴィエンチャン（ラオス）に決まった。そして、移動は基本陸路。あとから思うことだが、なんだかんだ陸路旅にしてよかったかなと感じる。先に前置きしておくが、今回の月例報告書の前半部分は個人的な旅の記録となっている。留学中は周りの国には行きやすい、ということ伝えるための記録なのだといっておこう。後半部分はまた留学生活に関する記録である。2月3日ハノイ発。4日～6日、ホーチミン。6日～8日、プノンペン。8日～12日、バンコク。12日～14日、ヴィエンチャン。旅のざっくりとした行程は以上のとおりである。

2月3日午前8時30分、ハノイ駅に着いた。旅の初めは寝台列車35時間の移動、であった。ハノイからホーチミンまでをつなぐ鉄道は、旧正月ということもあり多くの家族が帰省のために乗車していた。2段ベッドが2つある一室だったのだが、相部屋になった人の人数はなぜか6人。旅の初めからベッドの数とその部屋にいる人数が合わないというよくわからない状況であった。二人姉妹とその両親の4人家族、4歳くらいの息子とそのお父さん、そして自分。合計7人でこの移動の大半を過ごした。確かに、あまりゆっくりはできなかったが、この人たちのおかげで列車移動を乗り切れた。ご飯や果物を分けてくれたり、英語の通じない駅員さんに代わりに話してくれたり、本当にありがたかった。昼夜の食事を、久しぶりに大人数で食べれたのも、とても嬉しかった。ほとんど言葉は通じなかったが、これも一つ、旅の中での素敵な出会いであった。そんな彼らも、途中下車の時が来る。ありがとう！と握手をし、部屋を出て下車していく彼らを見送った。そんなこんなで後半の10数時間は一人で列車内を過ごしていた。窓から眺める景色は、山の中であったり街中であったり草原であったり、すぐに過ぎ去っていきなりたくさんの表情をしていた。しかし、退屈ではあった。鉄道から降りれないまま30時間が過ぎたころ、電車酔いがしてきた。電車も、乗りすぎるのは体に良くないらしい。そして乗車から35時間後、2月4日午後20時前、サイゴン駅（ホーチミン）に到着した。駅構内で食事を済ませた後、バイクタクシーでゲストハウスへ行き、チェックインを済ませた。ホーチミンでの宿は8人相部屋のゲストハウス。値段は一泊250円という驚きの価格。ベッドだけは快適で不自由なく寝れたが、シャワーとトイレは気にはしないがお世辞にも綺麗と言えるものではなかった。言い忘れていたのだが、太陽暦の大晦日にあたるのがこの2月4日だ。ならばベトナムの年越しを体験せねば、そう思い22時過ぎ、ゲストハウスをでて街の中心地まで1時間半かけて歩いて行った。そして年

越しの瞬間。打ちあがる花火。湧き上がる歓声。日本じゃこんなにぎやかな年越しはないな、と驚くと同時に、一人で年越しして寂しすぎる、とセンチメンタルな気分になった。この件に限らず、「旅」は一人でもいいが、旅行観光は一人でするものじゃないなと感じた。きれいなものを見ても、美味しいご飯を食べても、変わった雑貨を見つけても、その感情を誰とも共有できないのは寂しすぎた。とはいえ、この時まだ一人旅2日目。先が思いやられる孤独旅であった。そして、合計3日間をホーチミンで過ごし、2月6日の朝、5時起きでプノンペン行きの長距離バスに乗り込んだ。バスのチケットは、事前に市内にあるバス会社に直接行き購入してあった。長距離バスでの国境越えは、すごく緩いものであった。荷物検査なし、出国審査はバス会社にパスポートを預けるだけでスタンプがもらえ、出国審査官とは顔を合わせることもなく国を出られる。入国はカメラでの顔の確認はあるが、多くのバスで溢れかえる国境では、その審査は完全に流れ作業であった。プノンペンまでは、約8時間のバス移動となった。途中の休憩所で食事やトイレを済ましながら、夕方前には目的地に到着することができた。

プノンペンでも同様に、次の目的地であるバンコクへのバスチケットを買い、残りの時間で市内を歩き回って観光した。先に予約していた宿ではなぜか、部屋の修理をしているから今日は泊まれないと追い出されたが、それも何とかかなり、平穏な時間をプノンペンでは過ごせた。しかし、旧正月ということで、主要なマーケットはほとんど閉まっており、町は少し静かだったように思う。プノンペンで一人さみしい3日間を過ごした後、やはり5時起きでバンコク行きのバスへ乗り込んだ。次は17時間の移動であった。

バス乗車後は1、2時間に1回という高頻度で休憩がありなかなかバスが進まず、予定より3時間遅れの国境到着となった。国境を越えるのは他にドイツ人のおじさんだけであり、この人と共に2時間ばかりでタイへと入国した。入国した後はバンに乗り換え食事休憩をはさみながら、午後23時過ぎ、なんとかバンコクへとたどり着いた。たどり着いてすぐ、WiFiを探し、タイの友人と、福井大学の先輩に連絡し、迎えに来てもらった。タイでは2日間先輩の寮に泊めさせてもらい、3日間はPBLに参加させてもらったので小幡先生と相部屋となった。おかげで宿代が浮き、とても助かった。バンコク2日目はタイの友人二人にバンコク郊外の水上マーケットに連れて行ってもらい、最高の時間を過ごすことができた。残りの3日間は後輩たちの参加するタイでの海外研修に混ぜてもらい、これまた温かい時間を過ごすことができた。そして2月12日、ラオスのヴィエンチャンまで唯一の空路でひとっ飛び。

ヴィエンチャンはハノイと違い静かな場所だった。誰一人クラクションを鳴らさない、それだけでこんなにも街は静かになるのかと驚きを隠せなかった。そしてその静かな街中は、日本を感じさせる雰囲気があった。なぜだかは分からなかったが、ホーチミンやプノンペンで過ごした時の寂しさはなく、心穏やかに3日間を過ごした。ヴィエンチャン以外の都市は2度目の訪問だったこともあり、ここでは新鮮さも感じることもできた。ゲストハウスのオーナーも気さくな人で、ご飯もおいしく、またラオスには来ようと思った。1日あれば街中

歩き回って大体の観光名所は回れるので、7、8時間かけて制覇していった。しかしながらお金がほとんどない旅であったので、観光名所を訪れるといってもお金のかかる所は外から眺めるだけであった。ラオスでのゆったりした日々した後、この旅の締めくくりには、25時間の寝台バスが待ち受けていた。バスチケットは、いくつかのゲストハウスを回って一番安く買えるところで購入した。ヴィエンチャン出発の前日に購入したチケットは20万キープ。だったのだが、翌日乗車前になって、「今日チケットの値段が上がったから追加で5万キープ必要だ」と言われ、支払うことになった。事前にネットで、このような状況は普通に起こることだということを見ていたので、まあ仕方ないかという感じだった。これまた旧正月価格で値段が上がっている時期だったのだ。そして無事にバスに乗り込んだのだが、現地人優先のこのスリーピングバス、外国人は一番後ろの連結シートに押し込まれる。三座席連結のため、ヨーロッパ人カップルと肩のあたる距離で寝ることとなった。寝そべると、顔から天井までの距離は50cmほど。このバスを過去に利用した先人たちの落書きで溢れた天井であった。もちろん、書かれているのはバスに対する文句や、この連結シートに座った者に対する忠告である。窮屈さはあったが、しんどさは最初の35時間鉄道旅が一番だった。その狭すぎるバス旅も、国境以外は無事に過ごせた。問題の国境、同じバスに乗っていた欧米の人たちの入国ビザに手違いがあったようで、それに巻き込まれて4時間も足止めを食らうことになった。ヒステリックになり怒鳴り散らすおばちゃんも現れ、精神的に少し疲れた国境越えであった。しかし、ここでもいい出会いはあった。ラオス人のお兄さんだったのだが、この人が食事の時の相手をしてくれたり、出入国の手続きなども手伝ってくれたり、この移動の間とてもお世話になった。ジャーナリストをしているといった彼であったが、またどこかで会えたらいいなと思う。

そして2月15日、ハノイに無事帰ってくる事ができた。久しぶりに戻ってくると、なぜだかこの場所が、すごく心落ち着く場所が変わっていた。福井で一人暮らしをしていた時と同じだった。住めば都。これは本当かもしれない。ただ、その土地で人との繋がりをつくる事ができたら、という条件付きではあるが。…話は戻るが、この一人旅が終わって二つ感じたことがあった。一つは、「ああ、このまま海外に住み続けてもいいな」と思い始めたこと。もう一つは、行動を自分から起こすことがまだまだ苦手だと気づいたことである。一つ目のほうは、ただ単に海外での生活に対して抵抗がなくなったからなのだろうと思う。通じる言葉が何か使えて、人との繋がりをつくる事ができれば、どこにでも住めるのだろう。二つ目は、もともと感じていたことではあった。人に話しかけたりするのは、やはり苦手らしい。この一年間で必ず破らなければならない殻である。それも、早急に。この話は次の後半部分に被ってくる話なので、そこで書き記していこうと思う。

旧正月休みが終わると、いつも通りの生活が戻ってきた。授業で仲のいいベトナム人の友達もでき、ほんのちょっとだけ学校も楽しくなった。中間考査もあったが、その友達のおかげで何とか乗り切ることができた。そして変わったことといえば、留学計画や人生設計をたびたび行うようになったことだろう。大きな夢や目標だけでなく、具体的な行動目標も立てて日々生活を送っている。もちろん、まだまだ怠惰に一日を過ごしてしまうときもある。が、そんな日々はこれから抹殺していきたいと思う。しかしながら、夢から逆算して書き出してみたことでやらなければならないことが明確になったのは大きな収穫であった。今は、国際協力人材の人材募集サイトに登録し情報を集めたり、数種類の資格を取ることを考えたり、そこからほんの少しずつではあるが物事が前に進み始めてきたことを感じている。ハノイの企業や観光関係に繋がりのある人も見つけたので、これからそういった人に片っ端からあたって NGO などでの経験も積んでいきたいと思う。

留學生活、何より大事なのはやはり「行動力」だと最近感じる。人生においても、行動力はとてつもなく重要なのだと思う。動いてからやっと頭の中にあるものが現実になる。動かなければ夢はいつまでたっても夢のまま。しかし、行動や努力もすればいいというものではない。その時その時の正しい行動を起こせて初めて、夢や目標が現実になってくるのだろう。今の自分には、この行動力が足りない。まだまだ殻の中に閉じこもっている。この一年の一番の課題を見つけた。「もう一つ殻を破ること。」このための一年にしようと思った2月であった。